

音 楽

新たな音楽の価値を創る子

—音や音楽と自己、他者との関わりを往還しながら学ぶプロセスを通して—



音楽科

新たな音楽の価値を創る子

—音や音楽と自己、他者との関わりを往還しながら学ぶプロセスを通して—

悴山 恵

指導要領の「見方・考え方」に基づく授業の型が確立されつつある中で、そこから抜け落ちてしまうものはないだろうか。子供が音楽科で味わうべき教科の本質と、音楽科の本質的な学びとは何だろうか。「何を教えることができ、評価することができるか」という観点による学習内容の設定から脱却し、子供の思いや問題意識を出発点とし、共に解決に向けて取り組んでいくような主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。今年度は、音楽科の本質的な学びを吟味した上で、子供が自分の学びを価値づける過程での①音や音楽と自己、②音や音楽と他者、③音や音楽を通じた自己と他者との関わりを考えていく中で、音や音楽をモノとして捉えるだけでなく、背景にある人とのつながりや生活、文化などに目を向けられるようなコトとしての音楽の学びのプロセスを構想した。

1. 音楽科の研究テーマ

(1) 問題意識

① 音楽科の課題

科学技術の発達により子供たちを取り巻く音楽環境が変化している。音楽の授業ではAI作曲アプリの登場で、音楽を演奏したりつくったりする技能が乏しい子でも、アプリの項目から選択していだけで自分の音楽をつくることができるようになった。このように技術の進歩によって音楽の技能面が補われていく一方で、AIがつくった音楽をどう感じたか、自分の思いやイメージするものに近づけるにはどうすればよいか、といった思考、判断して表現する力がより一層重要になっている。

近年の音楽科の授業実践は「学習指導要領」との関わりの中かで、「音楽を形づくっている要素」に焦点化した「知覚と感受」を軸とする展開といった一定の「型」が確立されつつある。それらは「西洋音楽美学的な音楽の捉えである」と榎下らは述べ、そのような「型」があることによって、そこから抜け落ちてしまうものがある可能性を指摘する。(榎下2022)また、子供たちが何を選擇してやるかという面からではなく「何を教えることができ、評価することができるか」という観点から音楽活動を決定しているカリキュラムの問題も指摘されている。教師が計画した枠組みの中でのみ子供に活動させ評価するといった授業では、子供が自分で学習内容や方法を選択する余地がなく、子供の主体的な学びにつながらない。子供の問題意識から課題を設定したり、子供が自ら課題を見だし課題を解決する方法を考えるたり、自己の学びを意味付けて次の学習へとつなげていくことを通して、主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。今改めて、味わうべき音楽科の本質は何なのか、どのようにして味わうのか(プロセス)、そしてどのように子供が学びを実感し次の学びへつなげていくのか、を問い直す必要性を感じている。

② 児童の実態

アンケート調査により、授業以外で子供たちが触れ親しんでいる音楽はより一層多様になっていることが分かっている。それは、インターネットやストリーミングサービスの普及による音楽の聴き方や、YouTubeやTikTokなどのソーシャルメディアの影響が表れていると考えられるが、音楽への関わり方はより個別化しており、子供同士で共有する機会はあまり設けられていないのが現状である。そして、それらの子供が授業以外で触れ親しんでいる音楽と授業で学ぶ音楽とが乖離しており、別々のものとして捉えている子供の姿が見受けられる。つまり、子供にとっての音楽が「学校の音楽」と「学校外の音楽」に分けられていて、それらをつなげたり結び付けたりする捉え方をしていないのである。それは、学校で学ぶ音楽が学校で閉じたものとなっており、学校外の子供たちの生活に意識が広がっていないことを意味している。

学習指導要領では「児童が音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力

を育成する」ことを音楽科の目標に掲げている。学校で学ぶ音楽が学校で閉じたものとなっていては、生活や社会の中の音や音楽に目を向け、子供が生涯に渡って音楽に親しみ続ける素地を養うことはできないと考える。学校の授業を通して子供の音楽の捉えである音楽観を揺さぶり、学校の外へと広げたり深めたりしながら更新できるような音楽経験が必要であり、そのような子供たちの意識も必要である。メディアの発達によって音楽にアクセスすることは容易になった。学校の音楽の授業でしかできないことは、それぞれの音楽的背景を持つ子供たちが、それらを持ち寄り、共有し、思いや意図を交流することを通して、ともに音楽することでしか経験できない音楽の価値を見いだしていくことなのではないだろうか。子供が音楽を通して自己、他者との関わりを往還する中で、新たな音楽世界を自ら切り拓いていく姿を目指したい。

(2) テーマ設定の理由

①テーマ：「新たな音楽の価値を創る子」とは

本校の全体研究テーマである「学びを創る」とは「一人一人の子供が、各教科等の本質的な学びを味わい、自らの学びを価値付けること」である。そこで音楽科部では「新たな音楽の価値をつくる子」を研究テーマに設定した。子供が音楽の学びを価値付けるためには、音楽をどのように捉えるかという音楽観に基づく価値観が重要である。それは子供一人一人違っており、音楽経験を通して変化し得るものであると考える。これまでにない価値観を生み出すこともあれば、これまで持っていたものに肉付けしたり、改変したり、ときには以前のもの戻ったりすることもあり得る。したがって「新たな音楽の価値を創る子」とは、子供が音楽を通して生まれた価値観で自らの学びを価値付けることにより、自分にとっての音楽の価値が変化し、音楽観が更新されていく子供であるとする。

②サブテーマ：「音や音楽と自己、他者との関わりを往還しながら学ぶプロセス」とは

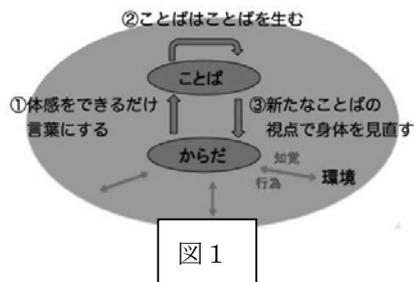
「学びを創る」ためには「本質を味わう学びのプロセス」が重要である。学習指導要領解説編によると「音や音楽は、『自己のイメージや感情』、『生活や文化』などとの関わりにおいて、意味あるものとして存在している。」という。つまり、音や音楽を物理的な「モノ」として扱うのではなく、自己との関わりや生活や文化との関わりの中で経験的に学んでいく「コト」としての音楽の学びが重要であることを示唆している。学習指導要領の「見方・考え方」には、音楽を通して捉えたことを「自己のイメージや感情」と関連付けることと、「生活や文化など」と関連付けることが並列に示されているが、両者の間には少し飛躍があるように感じる。そこで、その間を取り持ち、懸け橋となるのが「他者との関わり」であるとする。自分がその音や音楽をどう捉えどう感じたのかといった①自己との関わり、音や音楽の背景にある人間の営みである生活、文化の側面から音楽を捉える③生活や文化との関わりの中に、ともに学ぶ仲間が音や音楽をどう捉えどう感じたのかといった②他者との関わりが入ることによって、音楽の捉えが①の自己との関係に閉じたものにならずに②の他者から③の生活や文化との関わりへと意識を向けやすくなるのではないかと。そして、これら3つは一方に直線的に段階を踏んでいくのではなく、相互に往還しながら学ぶプロセスであるとする。鳴り響く音の分析で音楽を表面的に捉える活動に終始するのではなく、音や音楽と自己、他者とその背景にある生活、文化などとの関わりを段階を往還しながら学ぶことで、音楽本来の「コト」としての学びが可能になり、音楽の本質を味わうことにつながると考える。

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 音楽科の本質の吟味

音楽科の本質を学習指導要領の「見方・考え方」と同義と捉えるならば、本質Ⅰは「音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」であり、本質Ⅱは「捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や文化などとの関連付けること」であるといえる。本質Ⅰ、Ⅱのいずれも「音楽に対する感性を働かせ」ることが前提であり、音楽科の学習を成立させる要件とされている。

前頁の檜下の指摘にもあるように、「音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」は西洋音楽美学的な音楽の捉え方に限定されているのではないだろうか。菅は、その点について「音楽の表現性や意味は『音楽そのもの』の形式的構造関係にあるととらえる脱身体的な音楽認識」として指摘する。菅は、エナクティブリズム認識論や「からだメタ認知」の視点から、「創造的な音楽活動のためには自分たちが奏でた響きに対する体感や内的な衝動が目標の響き自体を変容させ、さらにそれを目指す試みが新たな体感や衝動を生んでいく相互作用的・循環的なプロセスが不可欠」と述べる。(菅 2022)学習指導要領には、「音楽に対する感性」とは「音楽的な刺激に対する反



応」「音や音楽の美しさなどを感じ取るときの心の働き」と説明されている。「音楽に対する感性」を働かせることが音楽科の学習が成立する要件であるならば、身体性の理論抜きには語れないだろう。そこで、諏訪の「からだメタ認知」の理論を援用する。諏訪は「自分の身体が感じていること(体感)をことば化することによって新たなことばの観点でからだを見直すことが可能になり、身体が為す行為や体感も進化する。更にことば化できる事柄も進化する」と述べる。(左図1参照)

これらを音楽の学習に置き換えた場合、「ことば」は言語としてのことばだけでなく、自分が表現する音や音楽、それに伴う体の動きや表情、オノマトペや言語化するのが難しい感覚的なものも含む表出全てが音楽的な「ことば」と考えられるだろう。そして、音楽科の学びを、子供が表出したものと自分なりに向き合うことで音や音楽を捉え、それをもとに思考、判断を繰り返しながら新たな表現を生んでいくプロセスと捉えたい。

したがって学習指導要領の文言を補足するならば「音楽に対する感性」を働かせる際に、体感の表出(音楽を形づくっている要素とその働きの視点を含む)と向き合うことで音や音楽を捉えること、捉えたことを「自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付ける」際に、他者との関わりを含むそれらの往還を通して理解することとなるだろう。

以上より、音楽科における**本質Ⅰは「体感の表出と向き合うことで音や音楽を捉えること」、本質Ⅱは「捉えたことを自己のイメージや感情、他者、生活や文化などとの関わりとの往還を通して理解すること」とする。**

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

前節では、音や音楽を物理的な「モノ」として扱うのではなく、音楽を自己との関わりや生活や文化との関わりの中で経験的に学んでいく「コト」としての音楽の学びが重要であることを示し、サブテーマを「音や音楽と自己、他者との関わりを往還しながら学ぶプロセスを通して」と設定した。①自己との関わり、②他者との関わり、③生活や文化との関わりを往還しながら子供が思考するプロセスを経ることで、音楽の本質的な学びを味わえると考えた。

自己の音楽の捉えを他者、生活や文化へと拓いていくためには、学習する際に「自分にとってこの音楽の捉えはこういうものだが、友達はどうのように捉えているだろうか」といった多面的な見方や、「いま学んでいる音楽はどのようにして今日まで発展してきたのだろうか」といった多角的な見方ができるような教材や学習の展開の工夫が必要である。また、①～③を相互に往還しながら学ぶために、それぞれに関連付ける視点を子供が持てるような学びのプロセスをデザインしたい。

全体研究テーマによると、教科の本質的な学びを一人一人の子供が味わうには、3つの省察的課題があるという。

「1. 包摂的(本質的)かつ切実(個別的)な課題設定」という点では、子供の思いや問題意識を生かした課題設定にすることが考えられる。「2. 多様な解決過程を支援する学習環境」においては、音楽科のサブテーマである音や音楽と自己と他者との関わりをつなぐための視点を共有することを重点にしたい。「3. 解決過程への批判的な振り返り」においては、自己の学びを価値付ける振り返りが重要であると考えられる。この点を研究の重点に据えて、研究テーマに迫りたい。

3. 研究の重点

(1) 子供一人一人の課題意識を生かした学習内容の設定

1 (1) ①音楽科の課題で述べたように、教師が決めた枠組みで子供に画一的な活動させるといった授業では、子供が自分で学習課題や方法を選択する余地がなく、子供の主体的な学びにつながらないと考えられる。子供一人一人の課題意識から学習内容や方向性を決めて学習を進めていく、主体的に学んでいく子供の姿を目指したい。

例えば、器楽合奏をする活動一つをとっても、子供一人一人にとっての課題は様々である。既に自分のパートの演奏が仕上がっている子にとっては「合奏全体をよくするにはどうすればよいか」という視点で課題設定するであろう。自分のパートの演奏がまだ仕上がっていない、まだ譜読みや練習段階の子は、「どうすれば自分のパートの演奏が上がるだろうか」という課題設定をするだろう。こういった場合、学級全体で目指す方向性は同じだとしても、個人個人がその時間に取り組みたいことは異なるはずである。そこで、個別の課題設定が必要になってくる。「今日はみんなでここまでできるようにしよう」といった同じ目標を掲げるのではなく、子供一人一人が自分の実態に合った課題設定をし

て達成に向けて取り組む機会を設けることで、子供一人一人が主体的により切実感を持って学べるであろう。

(2) 音や音楽と自己との関わり、音や音楽と他者との関わりをつなぐ視点の共有

音楽科のサブテーマである①自己との関わり、②他者との関わり、③生活や文化との関わり、を往還しながら子供が学ぶために、それぞれを関連付ける視点を子供が持てるような学びのプロセスをデザインしたい。例えば、「自分はこの曲を聴いてこう感じたけれど、友達はどう感じたか」、「作曲者はどのような意図で作ったのか」という視点で見ることによって、同じ曲でも人それぞれの解釈があったり、作曲者の考えと自分の感じ方の違いに気付いたりできる。そこから、その曲ができた文化的背景や当時の人々の生活に目を向けることで、よりその音楽を多角的に理解できるだろう。人との関わりを通して音や音楽を見ることで、音楽を「コト」として学ぶことを重視したい。

(3) 自己の学びを価値付ける振り返り

音楽科の研究テーマである「新たな音楽の価値を創る」とは、1 (2) ①で述べたように、一人一人の子供が持つ音楽観に基づく価値観で、自らの音楽の学びを価値付けることである。自分の学びに価値を付与できるかどうかは、この音楽観の深まり、豊かさによって決まる。音楽観を深め、豊かにするためには、子供が新たに出合った音楽や自分の価値観にない音楽を異質なものと排除せずに、自分との関わり方の視点で関係性を考えていく中で、受け入れたり理解したりする過程が重要である。また、それは他者との関わりや関係性の中でもたらされるものもある。(2)で述べた学習プロセスを通して「音楽科の本質的な学びを味わう」ことにより、自らの音楽の価値を問い直し、音楽観を更新していきけるような振り返りを重点とした。

4. 成果と課題

(1) 研究の成果

今年度の大きな成果としては、教科の本質を再考したことが挙げられる。特に知覚、感受を軸とした「音楽を形づくっている要素とその働き」に焦点化した授業の在り方に以前から疑問を持っていたので、本質Ⅰを身体性の点から再考できたことが成果であるといえる。さらに本質Ⅱの視点で授業を考えることによって、「他者との関わり」の側面から社会科の学習ともつながるような学びの可能性を見いだせた。個人研究のテーマとも関連させて、学会や実践発表で研究の成果を報告することもできた。

(2) 今後の課題

今年度は、研究の重点の二つ目に当たる本質Ⅱの視点を実践に取り入れることはできたが、本質Ⅰの吟味に時間を要したため実践に取り入れることができなかった。来年度は、本質Ⅰで吟味した「体感の表出と向き合う」という視点を授業に取り入れて実践をしたい。

部内授業や授業セミナーでは、本質Ⅱの視点で題材づくりをして授業を行うことはできたが、時間配分や展開の工夫の面で新たな課題が浮き彫りとなった。来年度は、「他者との関わり」をさらに効果的に学びにつなげられるような工夫をして臨みたい。社会科だけでなく、他教科との関連をさらに促せるような題材づくりも引き続き進めていきたい。

【参考文献等】

- ・ 檜下達也 (2022) 「音楽科教育の実践研究を問い直す」『音楽教育学』第 51 巻、第 2 号、76-77 ページ。
- ・ 菅裕 (2022) 「音楽科教育における自己調整およびメタ認知に関する研究動向」『音楽教育学』第 52 巻、第 1 号、36-45 ページ。
- ・ マロックとトレヴァーセン編著、根ヶ山光一・今川恭子ら監訳 (2018) 『絆の音楽性：つながりの基盤を求めて』音楽之友社。
- ・ 諏訪正樹研究室 SuwaLab https://metacog.jp/index.php/major-concepts/concept_1/

第6学年「日本や世界の国々の音楽に親しもう」

—子どもと演奏者との関わりを通して—

俣山 恵

1. 課題意識

(1)実践の経緯

音楽科部の研究テーマである「新たな音楽の価値を創る子」とは、子供が音楽を通して生まれた価値観で自らの学びを価値付けすることにより、自分にとっての音楽の価値が変化し、音楽観が更新されていく子供であると考えている。そこで、子供が現状音楽をどのように捉えているのかを知るために、「あなたにとっての音楽とは」というテーマでマインドマップを描かせた。その結果、学校で学ぶ音楽と学校外で触れたり親しんだりしている音楽をつないで描いている子と、つながりを持たずに区別して描いている子がいることが分かった。学校の音楽の授業で学んだことと学校外での音楽経験がつながらなければ、学習指導要領に示されている「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成」はできないのではないだろうか。そこで、個人研究のテーマとして「学校の内と外の音楽の『越境的学習』に着目した音楽科授業の構想」を掲げ、6年生1クラスを対象に、子供が学校で学ぶ音楽と学校外で触れ親しむ音楽とをつなぐためのプロジェクトを計画した。そのイに当たるのが、本題材である。(次ページ(4)題材について参照)

(2)個人研究テーマ「学校の内と外の音楽の『越境的学習』に着目した音楽科授業の構想」との関連

① 「越境的学習」について

エンゲストロームは、学習者が複数の状況を横断する際に、そこで生じる葛藤、摩擦などを「越境」という価値として捉えなおした。「越境的学習」の境界とは「自らが準拠している状況」と「その他の状況」との境を意味し、この境界を往還しているという個人の認識が存在するときに「越境的学習」が成立する(石山2018)。本研究における「越境的学習」は、個々の子供の音楽観＝「自らが準拠している状況」と、授業で新たに出会う音や音楽＝「その他の状況」との境界を子供が自覚的に往還しながら学ぶことである。

② 「越境的学習」を成立させるために(「ハイブリダイゼーション」と「越境ラボラトリー」)

越境が生じるプロセスの1つである「ハイブリダイゼーション」に注目する。「ハイブリダイゼーション」とは、「異質な文化が同じ時間や場所で交わり、新たな実践やモノや知識を創造していくこと」である。(香川・青山2015)それを音楽の授業に置き換えた場合、異質な文化とは、個々の子供が授業で新たに出会う音や音楽、それに伴う子供や教師など他者の価値観であり、それらの間に「ハイブリダイゼーション」が生じると考えられる。

このような「越境的学習」を成立させるためには、組織的な仕掛けが必要であるという。その一つに「越境ラボラトリー」がある。「越境ラボラトリー」とは、「異なる部署や集団のメンバーが同じ対話の場に集まり、何らかの境界問題の乗り越えを図るべく、情報の交換やアイデアを出し合い、新しい知識やツールやコミュニティ間のつながりを協働で創造していく実践」(香川・青山2015)で、エンゲストロームらが提案するものである。この取り組みでは、特定の集団や幹部が方針をつくり下におろすのではなく、各現場の当事者らが集まり、知識創造や意思決定の過程を共有するものである。本題材では、「越境ラボラトリー」の考え方を取り入れ、授業において子供が情報交換しながらアイデアを出し合う中で、異質な文化との境界について考え、協働で越境できるようなプロジェクトを計画した。

(3)題材について

1学期のマインドマップの結果を受けて、学校内外の音楽についてより詳しく調査するアンケートを行った結果、次頁の図1のようになった。子供には学校の内と外の音楽を区別している意識があり、それらを相互に関連付けて認識している子供の割合は半分以下であることが分かった。

そこで2学期からプロジェクトを計画するにあたり、「越境ラボラトリー」の手法で、「学校で学んだり触れたりした

音楽を、学校外の音楽へとつなげたり、広げたりするためには、『音楽の授業』でどんな活動をしたらよいか」というテーマで子供たちが授業で扱いたい内容のアイディアを出し合った。その結果、ア. 子供が学校外で触れ親しんでいる音楽を授業で扱ったり、紹介したりする活動と、イ. 外部講師によるゲスト授業など学校の外から協力者を呼んで授業をするといった意見が複数見られた。そこで、2学期にアを、3学期にイを行う計画を立てた。

2学期のアは、自分が学校の外で触れ親しんでいる音楽について、それらを紹介する形で発表し合うものである。最終的には14組がそれぞれのテーマで発表した。発表後のアンケートでは、7割を越える子供が『音楽』の捉え方やイメージが変わった」と回答した。(図2)「変わらない」と回答した子供の中には「どんな音楽でも同じ音楽に変わりはない」といった様々な音楽を受け入れる立場の意見が多かったが、中には「音楽は自分が楽しむために聴くもの」といった限定的な見方をしている子も見られた。

アの結果を受けて、イの本題材では日本の伝統的な音楽である「雅楽」、「世界の国々の音楽」を教材に設定した。世界の国々の音楽は子供たちにあまり馴染みがないと予想されるので、日本の音楽と世界の国々の音楽とを比較しながら、段階的に視野を広げていく展開にした。本時で扱うジャワガムランは、王宮の音楽という点や、その場の状況に応じて演奏が変化する点、互いに聴き合いながら合わせていく点など雅楽と共通する部分が多いと感じている。そういった音楽の文化的側面にも焦点を当てることで、③生活や社会の中の音や音楽との関わりへ繋がりやすいと考えた。本学級の子供の中には、2学期に「ハンドパン」や「ケーナ」という民族楽器を取り上げて紹介している子がいる。そういった子供たちの興味、関心が本題材の学びとつながることを期待する。

2. 研究テーマとの関連

(1) 音楽科の本質に迫る単元づくり

①本題材における教科の本質Ⅰ

本質Ⅰは「体感の表出と対話することで音や音楽を捉えること」である。本題材は鑑賞教材が主なので、音楽を聴いて感じたことを子供が言葉だけでなく音や音楽、それに伴う体の動きや表情、オノマトペや言語化するのが難しい感覚的なものも含む方法で表出したものを自分なりに捉え、それをもとに思考しながら子供が音楽の特徴を捉えていく姿を目指す。第5時までは様々な国の音楽を比較する中でそれぞれの音楽的特徴を捉えていき、第6時では実際にジャワガムランの演奏を通して、実際に楽器に触れた感触や楽器の音色や響き、互いの音を聴いて合わせていく演奏の面白さを感じたり、共有したりしながら、これまでに学習した内容と関連付けて音楽の特徴を捉えていく姿を期待する。

②本題材における教科の本質Ⅱ

本質Ⅱは「捉えたことを自己のイメージや感情との関わり、他者との関わり、生活や文化などとの関わりとの往還を通して理解すること」である。本題材における「他者」は、ともに学ぶ教師や子供同士だけでなく、実際に対面するジャワガムランの演奏に携わる「ランパンサリ」の方々、鑑賞するそれぞれの国の音楽に携わる方も含む。音楽を自己との関係性だけでなく、人間の営みとして広く捉えさせたい。そのためには子供同士のような身近な他者との関わりから、初めて対面する演奏家の方々、という段階を経ていくことによって、音楽を演奏するその国や地域の人々

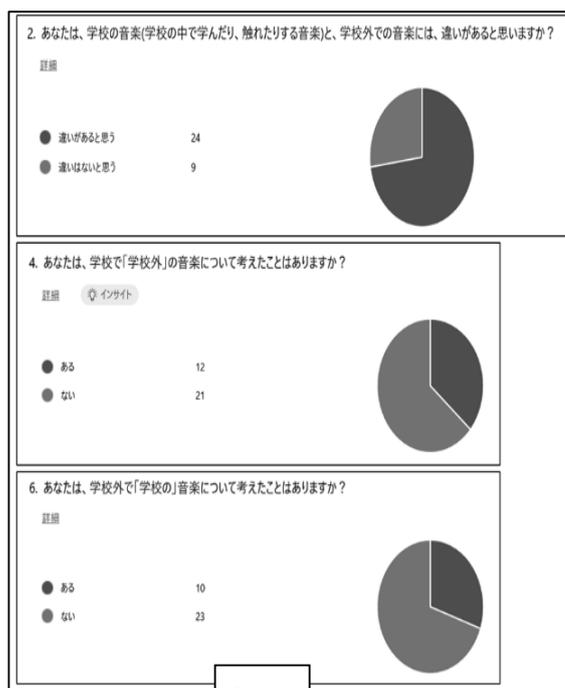


図 1

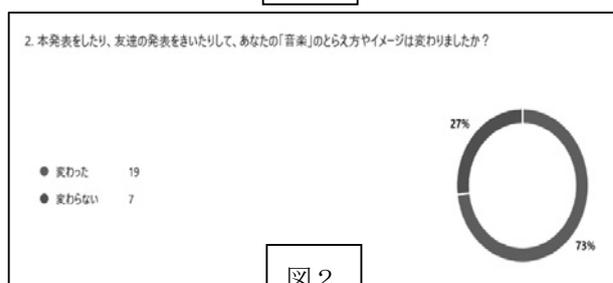


図 2

の生活や文化へと視野を広げやすくなると考えた。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

① 子供一人一人の課題意識を生かした学習内容の設定

本題材は様々な国の音楽を比較鑑賞する活動が主であるが、どのような手順で鑑賞したいかは子供によって違うと考えた。同じ曲や曲の一部分を繰り返し聴きたい子、まず一通り聴いてから次の手順を考えたい子など、その子のペースで聴く時間が必要である。また鑑賞していく中で、興味・関心を持つ部分や詳しく調べてみたい音楽も人それぞれである。授業の最初と最後に全体で音楽を鑑賞するポイントを押さえたうえで、子供が自分の課題をもとに自分のペースで取り組めるようにした。

② 音や音楽と自己との関わり、音や音楽と他者との関わりをつなぐ視点の共有

本題材では様々な国の音楽を物理的な音楽という側面だけではなく、音楽が生まれた背景やその国の文化的側面にも着目し、生活や文化との関わりへとつなげたい。そのためには、音楽に携わる人との関わりを切り口にし、演奏している人はどのような場、目的、気持ちで演奏しているのか、聴く人はどうなのか、といった人間の営みの中での音楽の在り方を考えられるような問いかけや、視点の共有をしたい。さらに世界の国々の音楽演奏家の方々にゲストを招くことによって②他者との関わりが子供と教師だけでなく演奏家の方々へと拡張し、③生活や文化との関わりへとより近づけるのではと考えた。

③ 自己の学びを価値づける振り返り

「新たな音楽の価値を創る子」とは、自己の音楽観を更新していく子供の姿である。子供が自身の学びを振り返る際に、「この音楽を学んだことによって自分にとっての音楽の捉え方（音楽観）は変わったか、それはなぜなのか」を子供に問うことによって、自己の音楽観の変化に自覚的に気づき、学びを価値付けられると考える。本題材では、これまで聴いたことのない音楽に新たに出会うことで、既に知っている音楽の捉え（これまでの音楽観）と比較したり関連付けたりしながら、音楽観を更新する子供の姿を目指す。

3. 実践の実際

(1) 題材名 日本や世界の音楽に親しもう

教材名 日本の音楽：「越天楽今様」 雅楽「越天楽」

世界の国々の音楽：バグパイプ、メヘテルハーネ、雅楽(アアク)、ガムラン、フォルクローレ（第6時：ジャワガムラン「ランバンサリ」の方々）

(2) 題材の目標

- 曲想及びその変化と、音色や旋律などの音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解するとともに、思いや意図に合った表現をするために必要な、範唱を聴いて歌う技能や、呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う技能を身に付ける。 【知識及び技能】
- 音色、リズム、旋律、音の重なりを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのように演奏するかについて思いや意図をもったり日本や世界の音楽や演奏のよさなどを見いだしながら曲全体を味わって聴いたりする。 【思考力、判断力、表現力等】
- 日本や世界の音楽の特徴を感じ取りながら歌ったり聴いたりする学習に興味・関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱や鑑賞の学習活動に取り組み、日本や世界の音楽に親しむ。 【学びに向かう力、人間性等】

(3) 題材指導計画（全6時間）

第1次：日本に古くから伝わる音楽に親しもう（雅楽）・・・3時間

- ・ 雅楽「越天楽」を聴き、音楽の特徴を捉える
- ・ 「越天楽今様」を歌い、「越天楽」の音階や楽器について知る
- ・ 雅楽について調べ、調べたことを発表する

第2次：世界のいろいろな国の音楽に親しもう・・・3時間

- ・様々な国の音楽の特徴を比べながら、よさを味わって聴く
- ・様々な国の音楽について調べ、調べたことを共有する
- ・ジャワガムランの特徴やよさに気付き、親しんで演奏したり聴いたりする

(4)実践の分析 ※研究テーマとの関連は波線

①第一次

雅楽は「なんとなく聴いたことはあるがあまりなじみがない」という子供たちの意見が主だったので、基本的な事項を動画で抑えたのち、自分の調べたいことについて調べる個別学習をした。調べたことは Teams で共有し紹介し合った。その結果、『『音楽』は聴いて楽しむものだと思っていたけど、雅楽の衣装やマイナーな楽器などが面白かったので、見て楽しむものでもあるなと思いました。』「西洋の音楽と日本の音楽（雅楽）は全然違うものだと思っていたので、似ている点があるのが意外だった。』「僕は、楽譜通りにひいたり、曲を作ったり、その楽器にあっている曲をひくだけだと思っていたけれど、和の楽器でオリックスの応援歌を雅楽の楽器で弾いていたりして音楽の可能性が頭の中で広がったような気がする。』といった音楽観が更新された子供の姿が見られた。

第一次の最後には、雅楽の演奏家の方に着目させるために東儀秀樹さんの取り組みや演奏を紹介した。それによって、『演奏家の方はどうやって生計を立てているか』などといった音楽文化を継承することへの関心や子供の疑問につながった。

②第二次

教科書の5曲の比較鑑賞では「比べる」をポイントに、どのような視点で何を比べるかに注目して鑑賞させた。児童にとって身近で親しんでいる音楽だけでなく、前次の「雅楽」との比較の視点や、「音色」「強弱の変化」などといった音楽の要素で比較できた。第3次では実際にガムラン奏者の方に来ていただき、演奏を鑑賞したり演奏を体験したりすることによって、より音楽の仕組みに関心を持たないように感じた。演奏者の方とのかかわりについては、子供から「なぜガムランを始めようと思ったのか」「演奏以外の生活のこと」などの質問が出たが、質問に答えていただくのみで終わってしまったので、もう少し十分な時間を取って関わる必要性を感じた。子供の振り返りでは「楽器ごとに役割が違って、打楽器だけで、こんなに面白い曲を作れることにびっくりしました。』「結構イメージが変わって、怖いと思っていたけど、そこまで怖くなく、きれいだった。』「世界には日本や西洋などと全く違う音楽あるんだなと思いました。』「ガムランはインドネシアの音楽だからインドネシアにあるバナナの葉や水牛の角や革が使われていて、伝統音楽だからその国の有名なものが使われていることが分かりました。』「音楽で世界とつながることが意外と身近にあるのだという事が分かりました。』と音楽観が更新された姿が見られた。

4. まとめ

成果としては、題材全体を通して音楽観を更新する子供の姿が多く見られたことである。主に、日本の音楽と世界の国々の音楽の比較鑑賞や、演奏家の人々の思いに触れることが効果的だったと感じた。一方で、すべての子供の音楽観が更新されたわけではないので、そのような子への手立てを今後の授業で考えていく必要がある。

本題材では、特に世界の国々の音楽が社会科の学習と関連する内容になっていたため、教科横断的な学習として扱うことで、音楽科の学びと社会科の学びを相互に高めていける実践へ発展できる可能性があると感じた。そうなったときに、音楽科としてこの題材で何を学ばせて他教科へつなげていくのかという視点をはっきり持っている必要があるため、その辺りを検討、吟味し今後の実践へつなげていきたい。

【主な参考文献】

- 石山恒貴 (2018) 『越境的学習のメカニズム』 東京、福村出版。
- 香川秀太・青山征彦編 (2015) 『越境する対話と学び』 東京、新曜社。